

和な世界への悲願をこめて心の正しい生き方を伝えていくこと、これが異郷の地で果てた私の母、弟、同胞たちへの手向けの供花としたい。

安らかに眠れ、母よ、弟よ、そして八万の同胞達よ……

撃ちのめされた興亜の礎

福岡県 石井 侃

私は二男であった。満州に骨を埋めることを決心し、昭和十四年、旅順工大鉱山科へ入学した。第二次大戦はますます激化し、学校の修学年も短縮された。卒業後「満州軽金属製造株式会社」（撫順市松岡町）に就職した。飛行機の部分品、アルミ、ジュラルミン製造に、夜も日もなく生産々々の日々だった。戦時中最も必要とする武器の一端製造だからである。しかし、戦争が激化し、会社の工員も次から次と召集され派遣されていく。残された者は責任ますます重大で、日夜生産々々と血眼になっ

て働いた。

二十年八月十五日あの終戦の詔勅を聞いた「まさか」「日本が負けた。」とめどなく悔しさに、涙があふれた。

私の家は、撫順市の西一条通りで、支那町に一番近い所にあった。会社の社宅で、六十戸いっぱいだった。敗戦によって満人の態度が一変し恐ろしい暴動が、起きた。

私どもは、社宅の屋根裏の梁の上に息をひそめ腰かけて、何時間も何時間もかくれた。飲まず食わず、こどもたちの口をふさぎ、小使はそのまま屋根裏でした。ひよっと見ると、この社宅目がけて、ワーツと五、六百人の満人が暴動に出た。大事に大事に持って来た全財産をひたたくっていく。ふとんが出る！ ミシンが出る！ 箆筒が出る！ ラチオが出る！ 洋タンスが出る！ 満人の心の浅ましさを、しまいには、畳、フスマ、障子、床板までとりこわした。こんどは命が危ない。飲まず食わず裸一貫で本社のある松岡町の独身寮へ夜中逃げ出した。

独身寮では茶碗三個と箸と毛布が渡され、何一つ物のない生活が始まった。何はともあれ、社宅の財産が惜し

まれてならぬ。皆話し合つて、ひよつと隠していた夜具類、米があるかもしれないということで社宅へいった。

びっくりびっくり社宅の入口には、日本刀を持った満人がはり番している。裏口からそつと入ったら我家はどこかという見当もつかず、畳も床下もない。ピーッと笛が鳴った。私ども日本人をみつつけて追つかけてくる。日本刀をふりかざしもうすぐもうすぐ。そのときの恐ろしさと足のはやかつたこと。パイと日本人社宅へ隠れた。その後同僚は逃げおくれ、一太刀を首にまた一太刀は腹をつかれ近くの防空壕へほうりこまれていた。私どもは、皆で首へガーゼをつめ腹へ白布を覆い奥さんの所へ運んだ。こども二人を抱えての生活は残された者の苦勞はどんなに、みじめで、あつたらうか。

独身寮の生活は、みじめであつた。日本人に米よこすな、食料品を売るなという命令で毎日毎日馬の飼料そっくりの高梁と、じゃがいもとにらだけの食事の連続だつた。

或日ソ連の兵隊が数人来てこの室をすぐ立ち退けと命令された。敗戦国のあわれさ、また別の一室を借りて

ホツとしたらまた立ち退けと三度ほど転居させられた。とうとう無順炭鉱の露天掘りへ働かされた。米一升と一か月の給料は同じであつた。

生活苦のためコークス（石炭の燃えかす）を少し持つて帰り燃料代わりにしようと思つた所を満人の検査にあい銃剣で頭をたたきのめされ、九死に一生を得た。

シラミはわくし、食物はなし、若い病弱人は次ぎから次へとこの世を去つた。遺体は運河の川原で薪を燃やし、火葬をした。

ときがたつにつれ高梁も食べられずポミー粉を熱湯でとき、にらとじゃがいもをあんとして団子に丸め、朝三個、昼四個、夜四個と貧しい食生活が四か月ほど続いた。あの異様な、ポミー粉の匂いは忘れられない。小さなこども二人はやせ細り青白くもやし同然、生きる気力もなくゴロゴロしていた。

二十一年七月内地送還の吉報、どれほど嬉しかつたとか。引揚船の出港コロ島までは二週間がかり、或日はヨタヨタキロの道を歩かされ、野宿した。勿論飯ごうで高梁をたいて、それだけの食事だつた。背中にリュック

ク前に二歳のこども、横に五歳のこどもを連れ野宿を重ねヨタヨタの逃避行が続く。あるときは草原で一列に並べられ荷物検査これと思うものは取り上げられてしまった。何もなくなつた。

一人千円計四千円持って、コロ島から船へ。船底ではお粥と芋つるのすまし汁しかし内地へ帰ることで勇氣が出た。

舞鶴へ上がって、すぐに引揚收容所へキュウリを運ぶトラックに腹ペコペコの群衆が、我先にととび上がり、もぎとつたキュウリをがりがり食べたあの惨状は今でも忘れられぬ。

脱走、三十八度線徒歩突破

宮崎県 日 高 亮 明

私は大正十五年七月渡満、撫順中学校に入學し、京城高校を昭和十年卒業して、満鉄撫順炭鉱に勤務していました。石炭は満蒙産業発展の原動力であり、また軍の作

戦行動に欠かせないものとして増産増産で鍛えられました。昭和十九年四月結婚しましたが、六月十日に召集令状がきて、牡丹江の部隊に入隊しました。

自動車隊で、ソ満国境に資材食糧等運搬していました。その後、部隊のほとんどが南方に移動し、残留兵で新しく部隊が編制され、間島に移り、同様の作業をしていました。

終戦の詔勅は聞きましたが、誰も信じませんでした。ソ連軍が参戦し、進駐してくる朝になり、私は部隊長を乗せて運転するよう命ぜられ、十台ぐらいの護衛車と共に、知らない土地に着き、私達は部隊に戻れと言われました。私の車のみ故障して、翌日部隊に戻りますと、皆ソ連軍の捕虜になっていました。私は衛門から引き返し、ソ連兵と戦うつもりで長白山に向かいました。途中で占領された部隊の前に、うず高く積まれていた小銃、弾、防寒外とう、防寒靴、鍋、釜などを二台のトラックに積みこみました。途中で兵隊を乗せ、二十人ぐらいになりました。頂上付近に達し、二日間野営していました。が、敗戦の間違いないことを知り、皆で協議しました。